



## 演奏ノート

【Ensemble Kiika】

Lapidabant Stephanum

人々はステファノを石で打った

人々はステファノを石で打った 金澤正剛 訳

人々はステファノを石で打ったが、

彼は声を上げてこう言った、  
主イエスよ、わが魂をお受け取り下さい、  
そしてこの罪をかれらに負わせないで下さい。  
そしてそう語ると共に、  
主のうちに眠り込んだのであった。

### ○逐語訳

Lapidabant Stephanum invocantem

人々は石で打つ ステファノを 声を上げる

et dicentem:

そして 言う

Domine Jesu accipe spiritum meum,

主 イエズス 受け取る 魂 わたしの

et ne statuas illis hoc peccatum;

そしてするな 定める 彼らに この 罪を

et cum hoc dixis,

そして共に、これ 語る

set obdormivit in Domino.

だが 眠り込んだ 内に 主

有名すぎるほど有名なクラウディオ・モンテヴェルディ(一五六七～一六四三)によるラテン語の宗教曲です。ご存知のようにこのイタリアの作曲家はルネサンスからバロックへの音楽史の転換を実現していった大音楽家で、マドリガーレとかオペラの大曲を世にのこしています。この同声のためのラテン語による三声曲は、彼が十五歳のおりに出版された宗教小曲集のなかの作品で、この作曲家の稀有の天才ぶりを証しする音楽です。もともとわたくしはわが国の女声合唱団がレパートリー不足を訴えながら、何故この曲集に注目しないのか不思議でなりません。まだ少年時代の作品ながら、あざやかなポリフォニー書法を身につけた音楽です。三つのパートに均等に割りあてられた旋律をゆたかに絡みあわせ、おだやかに充実したハーモニーをくりひろげてゆきます。

各パートの自己主張と全体のアンサンブルと、そのふたつのバランスがこの作品の生命といえるでしょう。譜面のうえではたいへんに単純で、すぐに歌えてしまいますが、しかし

そのなかから充実した音楽の訴えを引きだしてくるとなると、磨いても磨いてもキリがありません。合唱団の実力のほどがごまかしようもなく露呈してしまうという、まるでエンマ様の鏡のような、ある意味では恐ろしい作品です。【皆川達夫 ハーモニーより】

### ミサ曲におけるラテン語について

一口にミサ曲と言われるが、実はミサとラテン語とは切っても切り離せない。カトリック教会では1962～65年におこなわれた第2回バチカン公会議までどこの教会でもラテン語の典礼文を使った。各国語による典礼は認められなかったのだ。

ヨーロッパの人にとってラテン語は、例えば漢文のようなもので、われわれ日本人が論語や漢詩を学ぶようにヨーロッパの知識階級は学校でラテン語を学ぶ。日常語としてはラテン語は使われない言葉となったが、教会や学問、政治などで生き続けている。

また、フランス語やイタリア語などラテン語直系の言語であるが、長い年月のうちに、ラテン語本体も文字、綴りは同じでも、発音は国や地域により、はたまた時代によってさまざまとなった。

19世紀の後半に、フランスのソレム修道院でグレゴリオ聖歌の研究が進んで、発音はイタリア風にすることが提唱された。また、20世紀に入って教皇のもとでイタリア式を基礎とした「ローマ式」発音が推奨され、教会音楽もこれに従って、イタリア式が広まったのだ。

しかしながら、1500年以上もの間各地でおこなわれてきた発音はそう簡単には変わらないということも事実としてある。その結果として、現在もさまざまな発音がきかれる。自国の演奏家だけで歌う場合にはその国のスタイルで歌われることもあるが、より国際的な場面で歌われるときはイタリア（教会）式とドイツ式が主流である。

イギリスではカトリックは少数派であるが、合唱音楽は盛んでルネサンス音楽も盛んに演奏されており、発音もイタリア式をとってきた。アメリカもイギリスに追随した。フランスでは自国式発音も根強いもののカトリック国であり、教皇のガイドラインに従ってイタリア式も広く普及した。

近年の研究により、オリジナル・スタイルへの追求が進んで、その時代的背景をもとにした発音で演奏する演奏家やグループも出てきている。しかし、スタンダードとなれば、国際的に通用しているイタリア式を基本にした「教会式」（20世紀初めに教皇がカトリック全体に推奨したもの）である。

参考文献：教会ラテン語への招き2001（江澤増雄著）、宗教音楽におけるラテン語の発音 1959（小泉功著 カワイ出版）、グレゴリオ聖歌1976（水島良雄著 音楽之友社）、レクイエム・ハンドブック1994（高橋正平著 株ショパン）、ミサ曲・ラテン語・教会音楽ハンドブック2001（三ヶ尻正著 株ショパン）

### 【合唱団Rinte】

Rinteのみなさま 第13回定期演奏会の選曲のための参考音源です。

### ○3 ステージ

【混声合唱による 日本の四季（平吉毅洲・飯沼信義編曲）】

<https://youtu.be/I18tpq55ZJc>

<https://youtu.be/Z4bL9JAxtJg>  
<https://youtu.be/LqvweHmDnc>  
<https://youtu.be/kFKsJtXd5Ug> など

【日本の四季めぐり(名田綾子編曲)】

<https://youtu.be/C38Qec6205Q>  
[https://youtu.be/\\_7KKhSRrTX0](https://youtu.be/_7KKhSRrTX0)  
<https://youtu.be/z474DmHroZ8>  
<https://youtu.be/EL0hfF3kelo>  
[https://youtu.be/\\_7KKhSRrTX0](https://youtu.be/_7KKhSRrTX0)

#### ○4 ステージ

【明日へ続く道(千原英喜作曲)】

<https://youtu.be/5MBBNyz14XU>  
<https://youtu.be/-uSAuoWrazg>  
<https://youtu.be/T9uBoVDDNcA>  
<https://youtu.be/gVnWncBGK3Y>

【空に、樹に・・・(新実徳英作曲)】

<https://youtu.be/CiuslWMAjPM>  
<https://youtu.be/TtBvlANhdW4>  
<https://youtu.be/1tS509Co1UQ>

【季節へのまなざし(荻久保和明作曲)】

<https://youtu.be/g8lcx8CYXts>

【Ensemble Clair, Kyoto】

アンドレ・カプレ(1879—1925)は、フランクのあとを受けて、フランス宗教音楽を更新することになるように思われる。精神と官能とが加わる彼の神秘主義。過重を避け、民衆的な或る種の感興に役割を分ちあたえ、「聖史劇」やペロティーヌスの「オルガヌム」の伝統の復活を彼がはじめるにあたって用いた上質な技法。この神秘主義と技法こそ、同時代の宗教楽派のあらゆる探求を方向づけることになるあのなのである。彼を受け継ぐ代表者たちは、彼の『イエズスの鏡』(1928)や、同じくチェロのための『イエズスの御公現』(1923)から、趣味と霊性と洗練の永続的な範例を汲む。『森の聖ウスター シュの子供たちのミサ曲』(1922)は、その春の日の太陽の光をはるか遠くまで放射する。『イエズスの鏡』は、ロザリオの秘法の環に対応する五つの情景を三系列あつめたもので、それぞれに暗示的な器楽の前奏曲がつけられ、十四世紀の細密画のような魅力を至っている。新しく力強い、信仰の作品である。(フランス音楽史より)

ピアニストのフランシス・プーランク(1899—1963)は、リカルド・ビニェスとシャルル・ケクランの弟子だった。まずサロンでの成功を求めて、彼はアポリネールの詩による歌曲集『動物詩集』(1919)とバレエ曲『牝鹿』(1924)で名声を博する。まもなく管弦楽の領域

を見捨てて、歌曲やピアノ音楽や室内楽の領域で抜き立てたが、劇場や宗教音楽に取り組むのをないがしろにしたわけではない。刺激的な和声にちかかわらず、上機嫌で、軽快で、しばしば わかりやすい音楽。これが、『三つの無動』(1918)とか、『遊 歩 場』(1924)とか、『八つの夜想曲』、『十二の即興曲』、四手用ソナタ(1918)、ソナタ(1953)など、彼のピアノ音楽に見いだされる特質である。歌劇は数があまり多くないが、たちまち成功を手に入れた。オペラ = ブッフア 『テイレシアスの乳房』(1947)はプーランクを、メサジェやピエルネ の後継者とする。ベルナノスの『カルメル会修道女の対話』(1957)では、ヴァーグナーとムソルグスキーとドビュッシーのあいだを揺れ動く「アリオーソ」ふうレシタティフをさがし求める。コクトーの台本による『人間の声』 (1958)で、彼は、ちっとずつと偉大な個性をきわだたせた。管弦楽の注釈によって区切られる長い劇的なレシタティフ。そのすべてが、ときとして崇高さに達する。宗教音楽では、これと同じぐあいについてる事がはこんだわけではない。その或るのは晩年に書かれたのだが、宗教音楽で彼は流行の波にいささか揺さぶられすぎた(『黒い聖処女への連騰』、混声四部合唱のためのト長調ミサ曲、『悔悟のときのための四つのモテット』、『サルヴェ・レジーナ』、『スターバト・マーテル』1951年、『グローリア』。作品中でいちばん良いものは、たぶん室内楽と歌曲のなかにある。二台のピアノのためのソナタ、フルートとピアノのためのソナタ、クラリネットとピアノのためのソナタなど……は、どれも質の高さを保っている音楽で、その点、クラヴサンと管弦楽のための『田 園 の 合 奏』や、オルガンと管弦楽のための協奏曲から、遠く隔たってはいないのである。自発的な歌をつ人であり、珍しい和声をさがし求めるプーランクは、彼自身の最上のものをたぶん声にあたえた。とりわけ、エリュアールの言葉につけた歌曲集『こんな日、こんな夜』や、マックス・ジャコブ の詩による世俗カンタータ『仮面舞踏会』や、アポリネール、 アラゴン、フォンブールの歌詞による歌曲のなかに。たちまち歓迎を受け作曲者にいつ変わらぬ人気を集めた、こうした作品のすべてが、両次大戦間と第二次大戦後、仲間の多くは彼らの芸術の更新をめざして構造上の探求に専念していた時期に、プーランクを、 グノやシャブリエなどの伝統を継ぐ魅力的で自発性ゆたかな大家として、歩ませつづけたのである。(フランス音楽史より)

プーランクについての書籍・・・現在のところ、日本語で読める書籍は「アンリ・エル著 村田健司訳 フランシス・プーランク」と「久野麗著 プーランクを探してー音楽と人生とー」の2冊である。

「小さな声」について・・・1936年プーランクはマドレーヌ・レーの詩による「小さな声」を書いた。三声の児童合唱のための無伴奏合唱曲である。一曲一曲がプーランクの友人たちの子どもに捧げられている。(アンリ・エル著 フランシス・プーランク P.136)

「黒い聖母への連禱」の完成直後の36年9月、プーランクは子どものための無伴奏三部合唱曲「小さな声」FP83を作曲した。これはルーアール・ルロール社の求めに応じた作品で、ベルギーの女流詩人マドレーヌ・レー (1901～81) の同タイトルの詩集から五篇を選んで歌詞とした。それぞれの曲は、知人の子どもたち五人に献呈され、第五曲「ハリネズミ」はレイモン (レイモンはリシャール・シャンレールに変わる新しい恋人) の息子ジャンに宛てられている。(久野麗著 プーランクを探してー音楽と人生とーP.139)

「アッシジの聖フランチェスコの『四つの小さな祈り』」・・・「アッシジの聖フランチェスコの『四つの小さな祈り』」は靈感にあふれている。豊かな表現力を持続しながらも、これまでの無伴奏合唱曲よりもさらに歌は素朴である。余分なもののない明快で簡素な旋律線は、聖フランチェスコの言葉を見事に表現している。

プーランクはこう書いている。「私は謙譲を表現したかった。それゆえに、四曲目の祈りでは、一人の修道士が他の僧を先導するがごとく、テノールが素朴な独唱を始めるのだ」。この「小さな祈り」は、プーランクの甥であるフランチェスコ派の若き修道士の依頼により、修道院の合唱団のために作曲された。(アンリ・エル著 フランシス・プーランク P. 155)

#### アッシジの聖フランチェスコ

ほぼ同じ頃、プーランクはまた断れない頼みを受けて宗教合唱曲を作曲した。こちらはプーランクの父方の叔父カミーユの孫にあたるジェラルム・プーランク(1925～89)から、カミーユ叔父を介して依頼されたものである。

当時ジェラルムは修道僧フレール・ジェロームの名を持ち、祭司の職をめざして修行中だった。その師にあたるシャンフレール教会のビュイレット神父が、教会で歌う「聖フランチェスコの祈り」に、ぜひフランスの作曲家に曲をつけてほしいと希望している、というのがこの依頼の主旨だった。ビュイレット神父は優れた音楽家でもあり、自らの教会で使用する音楽を刷新したいという考えも持っていたという。八月初旬に届いたカミーユ叔父からの手紙には、フランチェスコ教会発行の「聖フランチェスコの祈り」の詩句の冊子も添えられていた。プーランクはこれに快く応じ、九月八日には無伴奏男声合唱曲《アッシジの聖フランチェスコの四つの小さな祈り》FP142が完成した。

このようなきわめて実地的な成立事情を反映して、献呈は「シャンフルーリのフランチェスコ会修道士諸兄とジェローム修道士 そしてその祖父でありわが叔父であるカミーユ・プーランクへ」という異例の形になっている。(久野麗著 プーランクを探してー音楽と人生とーP. 241～242)

「アヴェ・ヴェルム・コルプス」・・・1952年、プーランクはピッツバーグの女声合唱団のために、穏やかで透明感あふれる無伴奏女声三部合唱「アヴェ・ヴェルム・コルプス」を作曲した。これが、アメリカ合衆国、ヴェネズエラ、カナダを一巡する演奏旅行のきっかけとなった。

プーランクの宗教観について・・・プーランクは知人の作曲家の自動車事故死を知って衝撃を受け、数日後、ユゼルシュからほど近いロカマドゥールの聖堂に赴く。そこは父の故郷アヴェイロンのすぐ近くの有名な巡礼地で、断崖から溪谷が見下ろせる、眩暈のするようなロカマドゥールの光景は、フランスでも有数の「絶景」として知られている。そこにある質素な聖堂の、黒い木に彫刻されたという黒色の聖母子像を前に、プーランクは心の静けさを見出し、それまで意識することのなかった信仰に目を開いたのである。そしてこの後、数々の宗教曲を手がけたプーランクは、この地をくり返し訪れることになったのだった。

クロード・ロスタンと宗教音楽について語った「対話」の中で、プーランクは自らの信



仰について、次のように述べている。

「私は家系的にも、」生来宗教心のある人間です。政治的な強い信条を持つことはできませんが、宗教を信じ実践することはごく自然なことと感じられます。私はカトリック教徒です。これは私にとって最も大きな自由です。とはいえ、母方が宗教に無関心でしたから、私も長い間信仰を怠っていました。正直なところ、1920年から35年までの間、信仰のことはまったくといっていいくらい考えていませんでした。(久野麗著 プーランクを探して－音楽と人生と－P. 129-130)



ロカマドゥールの黒い聖母

(プーランクが求婚したものの、プーランクの同性愛傾向を察知していたため、それは叶わなかった) リノシエを失ったからのプーランクについて、イヴリーは「他の男性や女性との関係でリノシエの物理的不在埋めてはいるものの、人生と音楽の案内人を失った悲しみから立ち直ることはなかった」と述べている。その後プーランクはリノシエの写真を入れた小さな写真立てを終生手放さず、旅先にもつねに持ち歩き、そばに置いていたという。彼女の本当の死因（非合法的な妊娠中絶手術によって引き起こされた腹膜炎によるもので、わずか32才だった）を考え合わせれば、プーランクの痛手の大きさはいかばかりだったかと、今日改めて深く理解できる。(久野麗著 プーランクを探して－音楽と人生と－P. 97)

※この黒い聖母の顔立ちは亡きリノシエによく似ており、「聖なる子」を膝の上に載せていることが、プーランクの心に一段と強く響いたのかも知れない。後にプーランクは「黒い聖母への連禱」を作曲している。